

# 水圧を利用してモモの摘らいを行う方法

福島県農業総合センター果樹研究所  
平成18年度農業総合センター試験成績概要

## 1 部門名

果樹 - モモ - 作業技術  
分類コード 04-02-29000000

## 2 担当者

志村浩雄・永山宏一・畠良七・木幡栄子・尾形正

## 3 要旨

モモの水圧摘らいは、実用的な摘らい効果を示し、作業時間の大幅な削減効果が確認された。しかし、水圧摘らいにより果面障害が発生しやすくなることから、処理時期は障害の発生しやすい時期を避け、発芽期前後か開花直前～開花期頃を実施する方が良いと考えられた。

- (1) 水圧摘らいの効果は、処理時期による差があり、発芽後16～22日の効果が高く、発芽当日や発芽後31日でも実用的な効果が見られたが、発芽後7日は効果が劣った。
- (2) 水圧摘らいにより葉芽の欠損が11～19%見られた。特に、発芽後22日処理で葉芽の欠損が多い傾向が見られたが、有意な差ではなかった。
- (3) 水圧摘らいにより、摘らい時間は72%程度削減され、予備摘果はやや多くの時間を要するものの、摘らいと予備摘果をあわせても33%程度の作業時間が削減された。
- (4) 水圧の強さによる摘らい効果に大きな差は見られなかったが、発芽期頃の花らいが小さい時期は6MPa程度が良く、以降は4MPaの方が効果が安定していると考えられた。
- (5) 極短果枝や短果枝は着果させたい先端部に残りやすいが、中～長果枝は着果させたい中間部が摘除されやすいので注意が必要である。
- (6) 水圧摘らいを実施した樹では、果実の一部の組織が隆起して突起状となるものや果実の表面が凸凹する果面障害が確認された。
- (7) 果面障害の発生は、水圧摘らいの実施時期との関係があり、発芽後1週間頃から開花前4日(本年は発芽後22日、平年は発芽後16日)頃までの間は障害果の発生が多くなる傾向が見られた。このため、水圧摘らいは、発芽期前後に行うか開花直前から開花期頃にかけて実施する方が良いと考えられた。
- (8) 仕上げ摘果時に見られる果面障害は、収穫期にもその症状が残った。しかし、軽微な白い点状の隆起については収穫期には目立たなくなるものが多かった。
- (9) 水圧摘らいと果面障害に関する試験は、単年度の成績であるため、その再現性について次年度以降確認する必要がある。

## 4 その他の資料等

- (1) 平成17年度福島県果樹試験場試験研究成績書